【 17 】

氏　名	清　水　嘉　治（しみず　よしはる）
学位の種類	経　済　学　博　士
学位記番号	論　経　博　第　35　号
学位授与の日付	昭和 49 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	**帝国主義論研究序説**
論文調査委員	（主査）教授 大野英二　教授 島　恭彦　教授 小野一一郎

論　文　内　容　の　要　旨

主論文『帝国主義論研究序説』はレーニン『帝国主義論』にかんする研究史の成果を整理した労作であり，第1章「レーニン『帝国主義論』の構造」は，『帝国主義論ノート』との関連で，『帝国主義論』の基礎視点の形成過程を追跡し，帝国主義の国内体制および世界体制の特徴づけとその段階規定を与えるレーニンの理論的構成の枠組みをおさえようと意図している。そこで，レーニン『帝国主義論』はマルクス『資本論』のたんなる直接的な継続ではなく，両者は理論的レヴエルを異にするものとして捉えられて，段階的認識が前面に押し出されている。

第2章「独占体形成の論理構造」は，帝国主義のいわゆる「5つの標識」と「歴史的地位」との統一的把握の枢軸となる，生産の集積と独占体の形成との関連について叙述し，競争と独占との関連および独占体による支配と強制の関係を貫ぬく独占利潤の法則に言及しており，第3章「『金融資本』概念の基本構造」では，ヒルファーディングおよびレーニンの古典的規定とその解釈をめぐって，金融資本概念を究明することに重点がおかれていて，金融資本と独占資本との概念の相違についても論じられている。

第4章「資本輸出の本質と機能」は，資本輸出の本質規定と形態規定との統一的把握を志向し，独占段階における資本輸出の理論的規定を試みたのち，イギリスの海外投資を例証として，独占形成期の資本輸出の諸形態について検討し，ヌルクセの国際資本移動論の批判も行なっている。さいごの第5章「『帝国主義論』と不均等発展の法則」は，不均等発展の法則にもとづくレーニンのカウツキー批判を取り扱い，この法則の理論的展開において技術導入の問題を主軸にすえるべきことを主張している。

なお，補論として，第1章「国家独占資本主義論の基本性格」，第2章「『新帝国主義論』の性格」および第3章「戦後非マルクス主義的帝国主義論の検討」が収められている。第1章は，国家独占資本主義論も，レーニン『帝国主義論』の構造と関連づけて捉えらるべきことを主張するのであるが，レーニン以後，なかんずく1930年代以後の国家独占資本主義の展開を歴史的前提として理論的構成の検討をなすべきことを要請しており，第2章は，第2次大戦後の資本主義の展開に対してはレーニン『帝国主義論』の命題は

妥当しないとするストレイチーやシュテルンの見解の批判や，ヌルクセやミントの後進国開発論の批判を，特に資本輸出の問題に焦点をあてて，試みている。第3章も，ヌルクセやミュルダールの低開発国における貧困の悪循環を断ち切る処方箋なるものが，総じて，低開発国の後進性を打破するよりも，むしろこれを保存する方向に作用することを論証しようとしており，また，ストレイチーが第2次大戦後の新たな歴史的条件のもとで貫ぬかれている帝国主義の問題を見失なって，国家独占資本主義の弁護論に堕していることを主張している。

参考論文『現代イギリス資本主義論』は第2次大戦後の世界経済の再編過程のなかでイギリス資本主義の構造的特質を解明することを主題としている。

序論「世界経済の再編成とイギリス」において，第2次大戦後の EEC の発展とイギリス資本主義の対応について叙述されたのち，第1部「イギリス資本主義の現段階」第1章「EEC 加盟問題とイギリス」は，イギリスの EEC 加盟を推進する主体として，シテイおよびこれと結びつく独占資本について分析し，第2章「現段階におけるイギリスの産業集中」は，ポンド危機に直面したイギリス労働党政権が，国際競争力強化の名のもとに，政府援助や産業再編成公社を通して企業集中を推進したことを解明しており，さらに第3章「イギリス産業におけるアメリカの投資」は，そうした再編過程にあるイギリス独占資本にたいするアメリカ系多国籍企業の投資の実態について検討している。

第2部「イギリス資本主義の戦後段階」第1章「戦後イギリス国家独占資本主義の発展」は，イギリス経済の停滞現象の根底に伏在するイギリス資本主義の構造的危機と，これに対応する国家独占資本主義体制の強化について叙述し，第2章「戦後イギリスの循環的再生産の特質」は，ソロートキン＝スピリドワ論争を通じてイギリス資本主義の循環的再生産の特質の解明を試み，第3章「戦後イギリス資本主義と『経済援助』の性格」は，イギリスの対外経済援助の実態と，そうした贈与や借款の形での国家資本輸出と民間資本輸出との関連について分析しており，補論「戦後イギリスの地域開発政策の性格」が付加されている。

論文審査の結果の要旨

第1次大戦前の帝国主義の古典的時代における資本主義の発展傾向の総括として，レーニン『帝国主義論』はモヌメンタルな作品であり，帝国主義論研究史において，このレーニンの労作の研究が最も重要な焦点のひとつをなしてきたことは至当なことであった。しかし，両大戦間および第2次大戦後における現代資本主義の展開は，レーニン『帝国主義論』の理論的枠組みによって果たして把握され得るのかどうか，その検討を要請した。こうして，理論と実証との関連について考察をすすめようとする場合に，総じて，レーニン『帝国主義論』の理論的構成を的確に把握する試みと並行して，その理論的構成をいま一度その立論の基礎にあったドイツやアメリカ合衆国やイギリスやフランスなどの主要資本主義諸国の帝国主義的展開の史実について確かめて，再構成を試みることが不可欠であって，そうした問題的視点からレーニン『帝国主義論』の現代における帝国主義の分析にたいしてもつ射程を再検討すべきであろう。

主論文において，こうした理論的構成を歴史分析なり実証研究なりによって検証しつつ，その再構成を試みるという，社会科学に不可欠の研究道程については，いちおう言及されてはいるが，内容的には展開

されていない。

しかし，主論文は，レーニン『帝国主義論』の研究史の整理を試みることに重点をおいて，広範な文献を渉猟しつつ，主要な論点をめぐる諸見解の検討により，今後に展開さるべき問題点を示唆している。

参考論文においても，主論文で展開された理論的構成が，参考論文の試みる現状分析とどのようにかかわりあっているのか，また，こうした現状分析は従来の理論的構成のどのような再構成を要請するのか，こうした理論と実証との相互媒介的な関連については必ずしも鮮明ではない。

したがって，主論文および参考論文は，明確な問題的視点で統一された理論と実証の成果とはみなし難く，ひとつの中間報告ともいうべき成果である。しかし，主論文は研究史の整理を通して問題点を鮮明にしており，また，参考論文も未開拓の現状分析の分野に鍬を入れていて，いずれも学界に裨益するところがすくなくない。

よって，本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認める。